

富士研収容所のWS

第1回歯科医師臨床研修指導医ワークショップ(Ⅱ)



「ようこそ富士研収容所へ」

囚人のイラストを画いた歓迎の標語が、OHPで全体会議室に煌々と掲げられた。研修所のグルリ四方は、昼も夜も何もない。楽しみは、富士山の雄姿と三度の食事だけ。

参加者は、怪訝そうにOHPを眺めながら席につく。参加者とスタッフ総勢50名、不幸があって参加者1名が欠ける。定刻13時、開講式。石井拓男厚生省歯科保健課長、佐川寛典財団理事長が挨拶した。

「皆さん。先生はやめて、さん付けでよびましょう」。ディレクターの中原が、神妙な参加者に袴(かみしも)を脱ごうと第一声を放った。さん付け?!—WSの導入に意表をつかれて戸惑いがひろがる。つづけて、「カジュアルでいきましょう」と、中原は締めていたネクタイを無造作に外して、クルクルと丸めた。この気障なパフォーマンスに会場はざわめいた。

さらに、当時ブレイクしていた韓国俳優を名指し、特別顧問の斎藤宣彦を「富士研のヨン様」と紹介して、笑いのうちに場内をアイスブレイクした。

4グループに分かれた参加者は、同じ階のグループ会議室と全体会議室をドタドタと忙しく往復する。時間厳守のスケジュールは、休む間もなくピシリ詰まっていた。アチコチで「〇〇先生」とよび

かけて、あわてて「〇〇さん」と言いなおすのが可笑しい。

夕方、遅参した東医歯大助教授俣木志朗が、息せききって駆けつけた。全期間の参加が要件であったが、そのまま参加を認めた。

21時、参加者は想定外の酷使からクタクタで解放される。酒好家は、唯一のオアシス「ミニ・バー」にあつまるところ。そこでも、一杯やりつつ熱い議論はやまない。一方、TFは30分間、今日の反省会と明日の打合わせだ。2日目は、8時半にはじまる。

翌早朝、山麓の乾風をついてはるかランニングする人がいる。誰?、TFの黒崎紀正だ。彼は学生時代、ボート部の名選手だったと聞かされる。…リラックスしてるなあ。

さて、第3回WSからWSのトップランナー住友がディレクターをつとめる。この頃には、学閥と専門を超えた本WSの評判が高まり、「富士研」という新語がひろまり、威勢あるステイタスとなる。バスに乗り遅れまいと、各大学は一席を争って参加した。

第3回の最終の反省会。特別顧問の斎藤が、「3年で医学部に追いつきましたね」と皆をねぎらった。過褒だったが、素直に嬉しかった。

(写真:記念すべき第1回WSの参加者・スタッフ、円内は遅参した俣木)